

ピアホームだより

2015. 11. 10

精神障害者の快復

—クラブハウス町田勉強会から—

9月26日(土)、町田市民フォーラムにて、クラブハウス町田主催で講演が開催されました。

創設者の友人・中村さんが突然亡くなられて早3年、クラブハウス町田も落ち着きを取り戻し、今年度、4回に亘って連続講演・勉強会を企画したものです。

第1回の今回は、東北福祉大学せんだんホスピタル院長浅野弘毅先生による講演です。先生は少し年上ですが、私とほぼ同世代。全共闘運動の嵐の中、日本の精神医療も問われ始めていた時代を過ごされた方です。

有名な映画「カッコウの巣の上で」(1975年)は、60年代のアメリカの精神病院を告発しましたが、日本においても、全共闘運動を経験した意識の高い青年医師達が実践の場につき、

次々と日本の精神病院のあり方を変えて行ったのです。

当時の精神病院はタコ部屋のような所にたくさんのお客さんが押し込められていました。

施設症のようになっているお客さん。

社会と繋がることの大切さ→病院解放と地域活動、そして、地域の生活の場としての共同作業所作りや家族支援等々。

今日、当たり前となって来たこの活動の基礎を先生は先進的に取り組んでこられました。

では、そのお半死のエッセンスを——。

精神障害者の回復とは？

精神障害者の回復とは、決して病前の状態に戻ることはありません。人生にやり直しがきかないと同じように、精神障害は病むものでなく生きてくるものだからです。

病気の前後では、ものの見方、感じ方、考え方に変容が起こっています。だから、回復でなくて快復です。単に病気をする前に戻るのではなく、人間関係の新たな展開と発展をともなうことをいうと考えなければなりません。つまり、新しい人間関係を生きることです。

治療的同伴者の重要性

「ビューティフルマインド」(2001年)では、快

復に最も肝心なことは支えてくれた奥さんの存在だったということを行っています。

障害者に限らず、人間は支え合って生きるもの、障害を持つとそれが断ち切られ、親子関係だけになりがちです。

親はいつか亡くなります。その後の障害者が不幸な結果を招くことを見聞きして来ました。

精神保健福祉の一端を担うことになった者として、ある時は自ら治療的同伴者となり、治療的同伴者を見つける役割を大いに意識すべきだと思います。

会場から、利用者の素朴で根源的な質問が次々と飛んでいました。治療のこと、家族関係のこと、将来のこと悩みがいっぱいなんですね。

どれも、すっきり解決できるようなことはありませんが、仲間と支え合いながら考えて行ってほしいものです。

私も親の立場から、悩みを共有することが多々あり、少しでも希望が持てるよう我がグループホームの成功例をお話して来ました。

今後のスケジュール

<11月6・7日>日本病院・地域精神医学会